



3. どこにある？—成川式土器のひろがり—



南西諸島の土器と成川式土器

新里貴之

はじめに (図1)

南西諸島(琉球列島・琉球弧・南島)には古墳文化が及ぶことはなかったが、土器文化として南九州の成川式土器に類似した脚台甕を用いる地域がある。それは、九州に最も近い南西諸島北部に位置する大隅諸島と奄美諸島であり、それぞれの地域の土器は「上能野式土器」を代表とする土器群(1～4)と、「スセン^{すせんとう}當式土器」を代表とする土器群(5～11)である。それより南に位置する沖縄諸島の尖底深鉢を指標とする無文尖底系^{うふとーばる}「大当原式土器」(12～18)、土器を用いることがない先島諸島の「無土器文化」(貝斧・石斧文化:19～23)¹⁾と対峙させると、その土器文化の地理的勾配の特徴は明らかであり、煮炊き用である甕または深鉢の形態からみた南九州の成川式土器の影響は、南西諸島の北部地区に色濃く表れていることになる。しかしながら、それらの地域においても成川式土器様式が採用されるわけではなく、島嶼部ごとに地域性をもつ土器様式を使用しているのが実態のようである。

以下に、成川式土器と関連性のある大隅諸島・奄美諸島の土器群の概要を示していきたい。

1 大隅諸島の土器 (図2)

現在、古墳時代並行期の土器として設定、通用されているのは種子島・上能野貝塚出土土器を標式とした「上能野式土器」である。器種は甕の単一型式であり、口縁部は肥厚して断面三角形になる。プロポーションは釣鐘形、やや上げ底の充実した脚台、砂粒を多く含み、焼成良好、ハケメやヘラ調整が施される。文様は胴上部に施され、鋭い沈線文で並行線を基本として、直線と曲線の山形やその変形文で構成される。また、胴部には刻みを有する平坦な突帯を巡らし、その接点で一方が垂下する。同じ形状の無文土器も存在しており、須恵器、土師器を伴わない(河口1973)、とされている。甕の特徴を捉えると「肥厚口縁脚台系土器」であり、現在まで一定範囲の調査範囲をもった遺跡で壺を伴った例がないため、壺その他の器種がほとんど伴わない様式となっていると考えられる(中園1988)。

この「肥厚口縁脚台系土器」の上能野式土器も、数段階に区分される可能性がある。

現在のところ、口縁(端)部形態と文様、脚台の形で区別されるもので、口唇端部が口縁部の厚さとはほぼ同様であるが、口唇部を平坦に押さえることで、外面側にわずかに粘土が突出し(26・27)、文様は一条の刻目突帯文や格子目状の浅い沈線文を施し(25～29・31)、低い中空脚台(30)を有する土器群が、種子島・本村丸田遺跡(盛園・酒匂1986)から一定量出土している。1点椎ノ木遺跡出土土器に類似した口縁部も出土している。ほかにも種子島・鳥ノ峯遺跡(橋口ほか1996)や広田遺跡(桑原ほか2003)で1点ずつ出土している。この段階を肥厚口縁系として分類することはできないが、肥厚口縁系の前段階の土器として位置づけられる。

馬毛島・椎ノ木遺跡(中村ほか1980)では、口縁部に平坦および三角形の粘土を貼りつけることによって、肥厚口縁となり、外見上は三角形の肥厚口縁となるものである(33・34)。直線や弧状の曲線を組み合わせる浅い沈線文が描かれているが(35)、文様の全体像は不明である。底部は中空脚台(36)と考えられる。三角形肥厚口縁のみ認められることによって他の遺跡の土器資料と区別される。

種子島・上能野貝塚(河口1973)では、三角形肥厚口縁部のほか(37・38)、口縁部外面に粘土板を貼りつけ、台形や四角形の肥厚口縁部にするもの(39)の両者が混在しており、文様は梯子状の文様や直線文などを

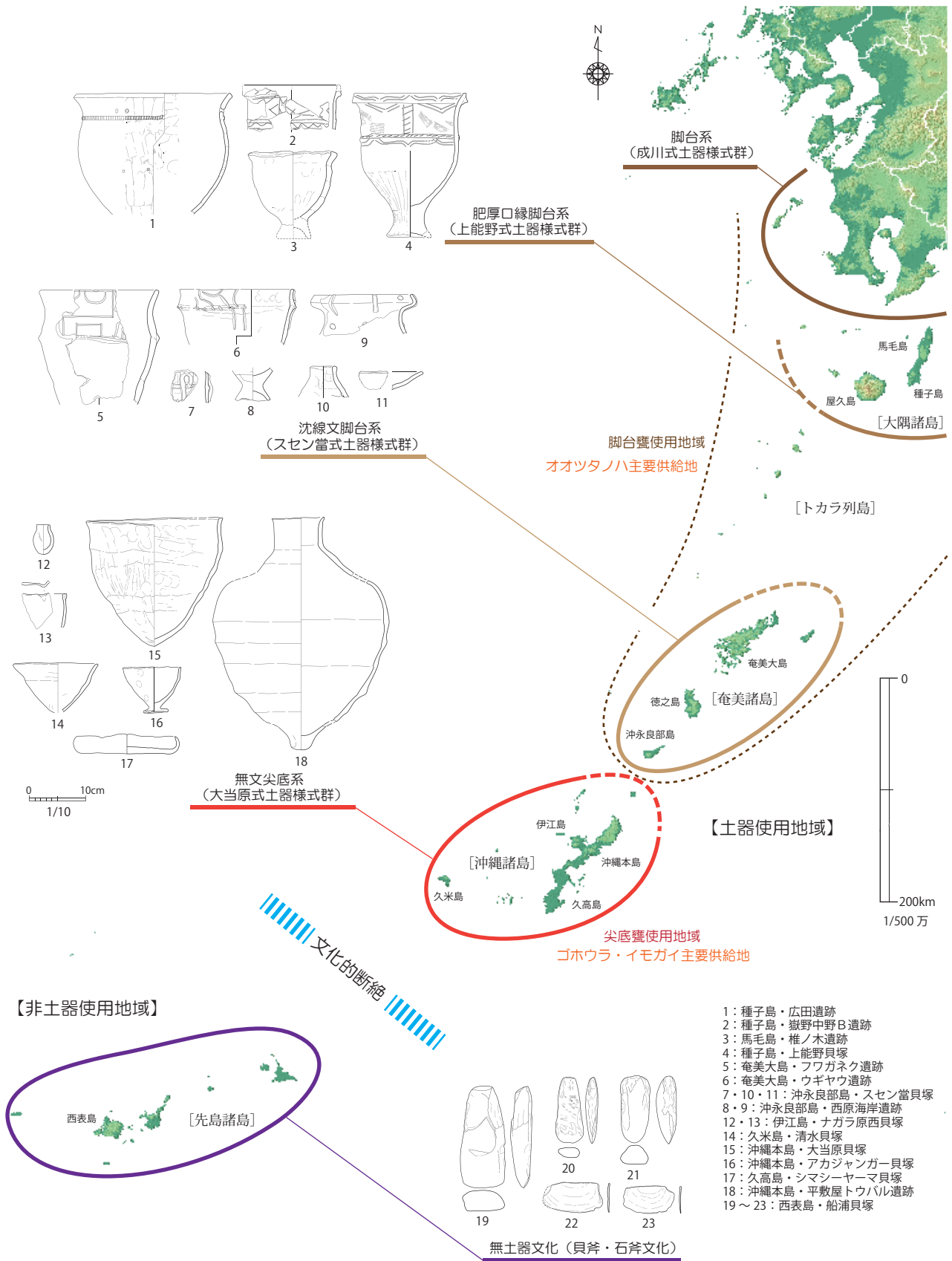


図 1 古墳時代頃の南西諸島の文化範囲

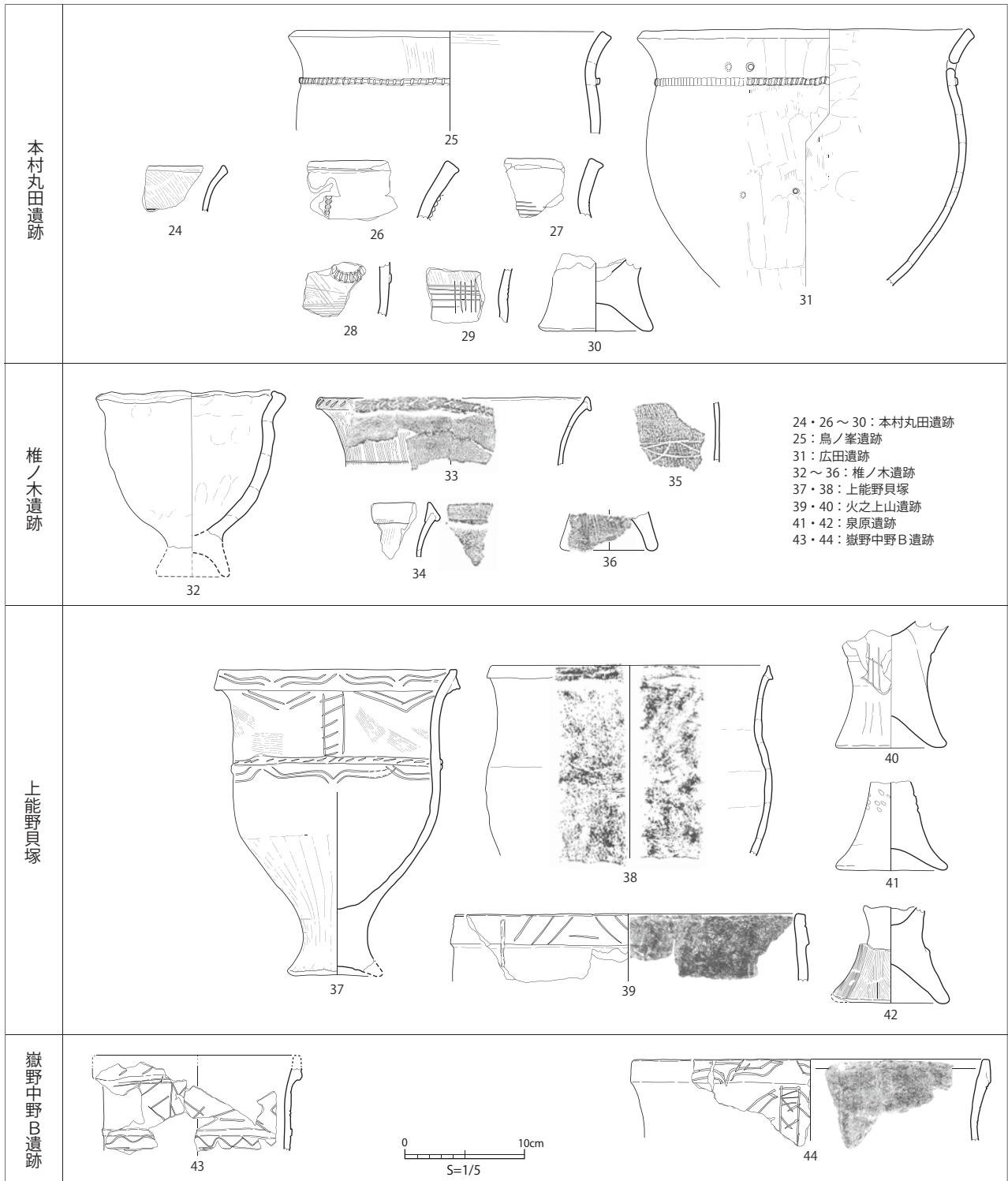


図2 古墳時代並行期以降の大隅諸島の土器

組み合わせて描き、平坦な突帯を胴部に巡らすこともある（37・39）。脚部は上げ底状になるが、底部の製作技法が大きく変わり、底面を底上げた円錐状の粘土塊の側面に胴部を積み上げていることが分かる（40～42）。また、この脚部の粘土塊側面には、深い沈線文や刺突文を施すことで、粘土が剥がれ落ちないように接合面積を増やす工夫がなされていることもある（40・41）。上能野式出土遺跡とされる段階の遺跡の多く（種子島・横峯遺跡：中村 1977、屋久島・火之上山遺跡²⁾：倉元 1996、白濱・三垣 2003 など）が、この様相を示している。

種子島・嶽野中野B遺跡（新東・大久保 1995）では、三角形状肥厚口縁部はほとんど消失し、四角形状肥厚口縁甕が主体の状況となる（43・44）。文様、脚部の特徴は上能野貝塚出土土器に類似する。

なお、これらの土器の施文部位は外面口縁部帯と口唇部などで、器面調整にハケメ調整がみられる。

以上のように、口縁部は、口唇部がやや拡張してゆき、粘土を貼付した断面三角形の肥厚口縁を呈するようになり（中園 1988）、断面台形・四角形の肥厚口縁と共存し、やがて三角形肥厚が消失し、四角形状肥厚のみとなる。底部は低い脚台、中空脚台がやや上げ底の高い脚台へと変化する型式学的変化が想定され、本村丸田遺跡→椎ノ木遺跡→上能野貝塚→嶽野中野 B 遺跡の各段階の序列になると想定される（新里 2009・2012）³⁾。しかしながら、現在でもこれらの土器群の開始期と終焉は明らかになっておらず、遺跡ごとの様相の違いで土器の状況が序列されているに過ぎない。弥生時代後期後半～終末期に「鳥ノ峯式土器」が位置づけられるので、本村丸田遺跡段階は古墳時代の前期頃と一部重なる可能性が高いが、その後の並行関係は不明である⁴⁾。また、終焉の段階については、律令機関である「多櫛嶋^{たねとう}」の成立（702 年）以前の 6 世紀代まで上能野式が継続すると想定するもの（中園 1988）、大隅諸島においては、煮沸具である土師器甕が 9 世紀後半代から確認されるので、上能野式も 9 世紀代まで継続している可能性があるとするもの（新里 1999、本田 2004）などがあったが、近年、種子島・太田遺跡（沖田 2004）において 8 世紀後半段階の土師器が認められるので、そこから古代律令期の土器組成へ移行すると想定するもの（石堂 2014）、また、大隅半島志布志湾岸の遺跡との比較から、上能野式を肥厚口縁部の製作技法の観点から、6 世紀末～7 世紀前葉とする見解（川口 2015）などが提示されるようになり、文献資料と考古資料の年代観が調和しつつある。

2 奄美諸島の土器（図 3）

現在、奄美諸島の古墳時代並行期の土器として型式設定されているのは、沖永良部島・スセン當貝塚出土土器を標式とする「スセン當式土器」である。器種は甕または鉢で、やや外反する口縁で、口縁部外面に三角形状や平坦な突帯を貼りつけ、底部は脚台であるとされている。南九州成川式と奄美諸島兼久式土器の特徴を有していると指摘される（上村・本田 1984）。その後、スセン當貝塚出土土器は再検討され、甕にも沈線文が一定量あり、少量ながら、壺や皿（浅鉢？）などの器種も伴うことが判明した（新里 2000）。スセン當式土器も、奄美諸島の弥生並行期の「沈線文脚台系土器」の系譜で捉えられ、南九州の成川式土器そのものではなく、大隅諸島の上能野式土器とも異なった特徴を持っている。

スセン當式土器は、甕の特徴として、口縁部と胴部の境界を屈曲させるものが多く、口唇部を平坦に整形する

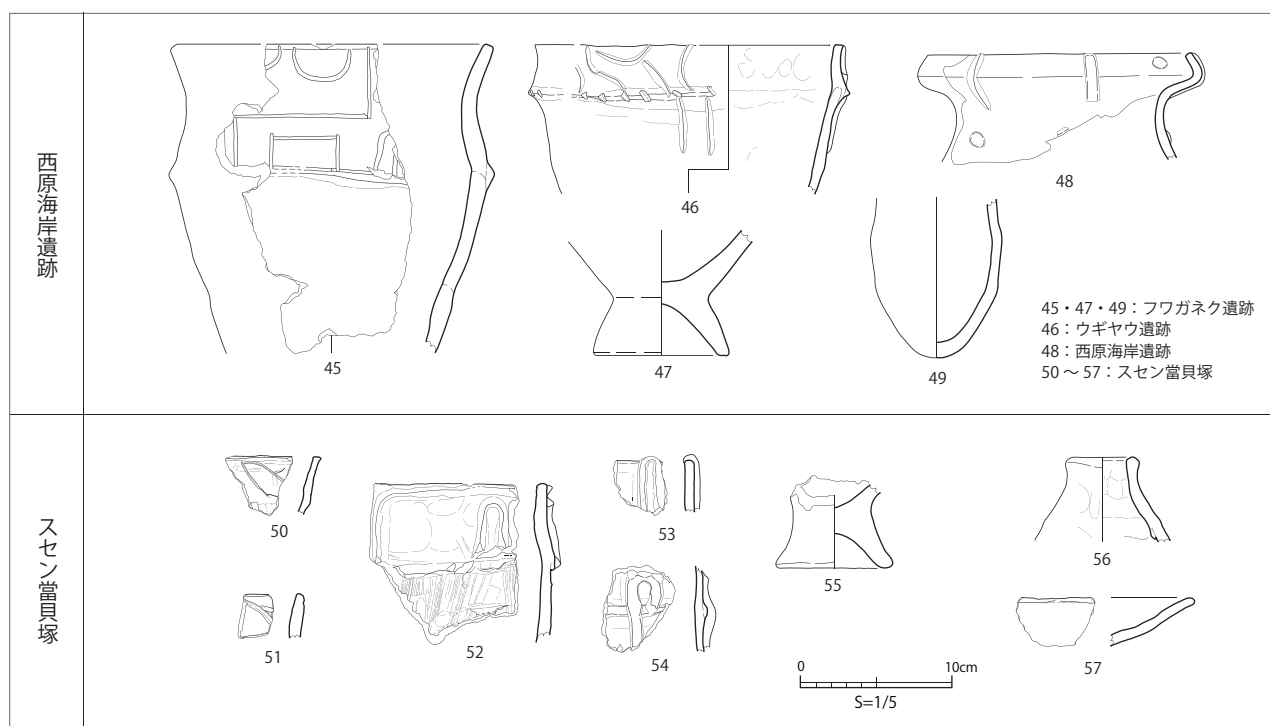


図 3 古墳時代並行期の奄美諸島の土器

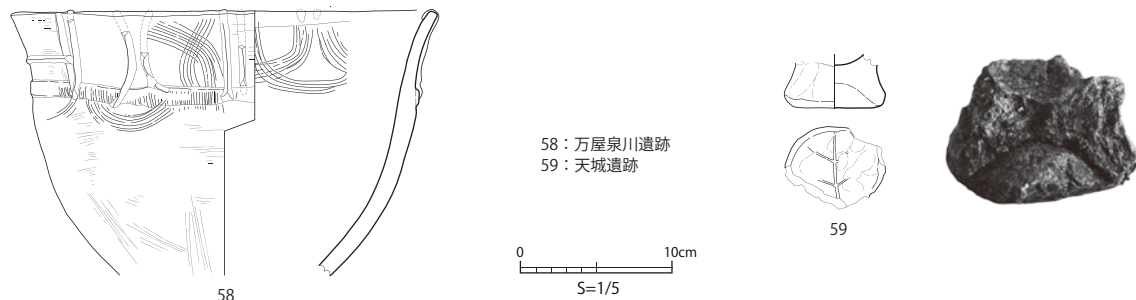


図4 奄美諸島スセン當式前後の土器

(45・46・50・52)。口縁部帯に断面三角形のミミズ腫れ状の突帯を配置するものが目立ち(46・52)、沈線文を有するものも一定量ある(45・50・51)。中空脚台を有する(47・55)のが特徴である。

現段階では、以下のように二段階に区分することが可能であると考えられる。

沖永良部島・西原海岸遺跡(北野・森 2011)出土の甕のミミズ腫れ状突帯を有する資料は、断面が三角形状のもので、袋状口縁壺を伴っており、この壺もまた、九州の袋状口縁壺にはないような円形浮文や平坦な突帯を貼りつけている(48)。フワガネク遺跡(高梨 2003)においては、沈線文を主体とした同土器群中に、ミミズ腫れ状突帯を有する甕が出土しているため、この段階になると考えられる。

沖永良部島・スセン當貝塚(上村・本田 1984、新里 2000・2013、新里・北野 2014)では、ミミズ腫れ状突帯のほか、平坦な突帯もあり(53・54)、ナデ肩の沖縄諸島の貝塚時代後期の壺に類似したものを伴っている(56)。そのほかにも皿あるいは浅鉢と思われる器種もある(57)。スセン當式土器の年代観は良く分かっておらず、5世紀代とするもの(上村・本田 1984)、沖縄ナガラ原東貝塚の類似土器出土層(Ⅳ・Ⅴ層)の放射性炭素年代を援用し、スセン當貝塚段階を5～6世紀なかばの可能性があるとするもの(新里 2013)などがある。また、スセン當式土器に後続する奄美諸島のくびれ平底系「兼久式土器」が6世紀代から出現するとする研究も多数あり(例えば高梨 2005)、古墳時代並行期の最終段階は、奄美諸島沈線文脚台系とくびれ平底系の転換期に相当するものと考えられる。

また、資料数としてはかなり少ないものの、型式学的にスセン當式土器の前後に位置づけられる資料も確認されている。ミミズ腫れ状突帯と浅い沈線文、平坦な突帯の組合せでは、スセン當式土器の特徴に類似するが、口縁部が屈曲せず直線状に開き、口縁部内外面に施文するという、前段階の弥生時代並行期の特徴をもつ甕(奄美大島・万屋泉川遺跡[中山 1983]:図4-58)や、スセン當式土器段階の中空脚内部に半球状の粘土塊を詰めて中実脚台とし、時期的に後続するくびれ平底土器様式「兼久式土器」甕の特徴である木葉痕を有する資料である(徳之島・天城遺跡[新里・北野 2014]:図4-59)。

ちなみに、大隅諸島と奄美諸島間に位置するトカラ列島では、古墳時代並行期の土器は未発見であるが、図1で見られるように、おおよそ200～250km圏内で類型化される土器様式が分布している南西諸島の特性からして、トカラ列島もまた、将来的にはトカラ列島をほぼ覆うような土器文化が展開していてもおかしくはない。将来の調査成果が期待される地域である。

3 土器の動き

近年の研究では、南九州の弥生時代後期～古墳時代の土器が、大隅諸島、奄美諸島、沖縄諸島でも散発的に確認されており、弥生時代前半期と比べると極めて低調となった南九州系土器の南西諸島への搬入の動きが、少ないながらも存在することが分かってきている(中村 2013)。それに対して奄美諸島のスセン當式土器は、これまでに沖縄諸島で確認されており、同諸島の無文尖底系土器主体のなかで、それを模倣したような土器も比較的に目立つ(図5)。奄美諸島では無文尖底系土器が確認されることもあり(奄美大島・屋鈍遺跡[西園 2009]、沖永良部島・西原海岸遺跡[北野・森 2013]など)、奄美諸島と沖縄諸島間では、少ないながらも土器の双方向的な動きと受容が認められることになる。いっぽうで、上能野式土器は大隅諸島の様式圏を越えた動きはほとんどみられず、極めて在地的な動きとして想定される。このことから、南西諸島においては、九州から長距離移動する成



図5 沖縄諸島出土のスセン當式土器

川式土器、島嶼部間を中距離移動するスセン當式土器および大当原式土器、島嶼部内で短距離移動する上能野式土器という、各様式の移動の特性が抽出できる。

4 土器様式圏の背景

南海産貝交易（木下 1996）は、主要な消費地である日本列島と、南海産大型貝（オオツタノハ・イモガイ・ゴホウラ）の供給地である南島を結ぶ遠隔地交易である。弥生時代初期から開始され、弥生時代後期に一時的に低調となるが、古墳時代中期以降、再び隆盛する（中村 2007）。また、この時期は大隅諸島広田遺跡が最大の南海産大型貝の消費地となっていることが知られる（木下 2003）。南海産大型貝のうち、ゴホウラ・イモガイの主要な供給地は沖縄諸島であるが、これは無文尖底系土器群の分布範囲に合致しており、また、オオツタノハの主要な供給地と考えられる種子島近海やトカラ列島、奄美諸島⁵⁾は、肥厚口縁・沈線文脚台系土器群の分布範囲と概ね合致している（図1）。このことから、貝交易と在地土器様式が無関係であるとは考えにくく、古墳時代における南海産貝交易の核（最大消費地・対日本列島の窓口）としての大隅諸島、オオツ

タノハ供給地であり、交易の仲介者集団としての奄美諸島、ゴホウラ・イモガイ供給地としての沖縄諸島というように、貝交易に関わる島嶼地域の、最もローカルな領域が土器様式圏としてあらわれ、各島嶼部の交易集団の往来のなかで、土器が搬入され、あるいは土器情報も伝達されたものと考えることができる。

おわりに

南西諸島の土器様式構造は、安定した主要器種が甕（深鉢）に限定されている点や、食器組成や祭祀行為に須恵器・土師器を導入しない構造という点において、日本列島とは明確に区分される島嶼型の土器様式である。このことは古墳時代の核となる地域から遠隔地にあることもさることながら、既に農耕社会に移行していた日本列島とは異なり、亜熱帯サンゴ礁資源を経済基盤とする狩猟採集社会で、伝統的に育まれてきた文化を基層にもつということが大きい。またこの文化は、豊かなサンゴ礁資源を有するがゆえに、日本列島との関わりを持ってきたといえるのである。

註

- 1) 先島諸島の無土器期は、約 2000 年前～800 年前まで断続的に空白期を有しながら存続すると考えられており、ここでは放射性炭素年代で弥生時代～古墳時代頃の並行年代が出ている西表島・船浦貝塚の遺物（Pearson 1981）を便宜的に掲げた。
- 2) 屋久島・火之上山遺跡は、同表記が正確なものであるとされている（白濱・三垣 2003）。本稿でもこれに統一する。
- 3) 2015 年 5 月 16 日の奄美考古学会種子島大会会場で最初の質問等があったが、筆者の古墳時代並行期に関する南西諸島内の土器の並行関係図が混乱を与えているらしい。筆者は 2009 年論考の表 1 の通りであると考えており、表中の大隅諸島とトカラ・奄美諸島列間が離れているのは、基本的に両地域の交差年代をとることができないことを示している。2009 年論考の図 2、2012 年論考の図 2 は、頁数の都合上、各地域の土器の形態の差を表すことを目的としたものであり、図間の境界の横線が並行関係を表しているものではない。混乱させていることをお詫びし、ここに明示しておくたい。
- 4) 石堂和博は、筆者のいう本村丸田遺跡段階を広田式（新）、椎ノ木遺跡段階を上能野式（古）、上能野貝塚段階を上能野式（中）、嶽野中野 B 遺跡段階を上能野式（新）とする（石堂 2015）。「肥厚口縁脚台系」である上能野式を古・中・新の三段階に区分する見解には賛同できるが、各段階の指標として挙げた土器には筆者と相違する点もある。
- 5) 従来、現生貝の生息域調査で種子島近海やトカラ列島がオオツタノハの供給地として想定されてきたが、近年、オオツタノハが奄美大島近海でも捕獲されることが分かってきた（忍澤 2013）。古墳時代における同貝生息域の議論は別にしても、奄美諸島の先史時代遺跡から出土する数が少なくないことから、考慮すべき見解であると思われる。

引用・参考文献

- 安里嗣淳・名嘉真武夫 1979『伊江島ナガラ原西貝塚』伊江村教育委員会
- 新垣孫一・川平朝中・国分直一 1957「久高島シマシーヤマ貝塚の調査概報」『文化財要覧』1957年度版 琉球政府文化財保護委員会 55-72 頁
- 石堂和博ほか 2007『広田遺跡』南種子町教育委員会
- 石堂和博 2014「大隅諸島の先史文化にみられる生業の特徴と変遷」高宮広土・新里貴之編『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』六一書房 159-170 頁
- 石堂和博 2015「古墳時代後期並行期～奈良時代における九州本土と大隅諸島の交流：古墳時代後期並行期から奈良時代における大隅諸島の様相を中心に」平成 27 年度第 6 回奄美考古学会（種子島大会）研究発表会資料
- 沖田純一郎 2004『武部製鉄所跡・奥ノ仁田遺跡・赤尾木城址・太田遺跡』西之表市教育委員会
- 忍澤成視 2013「奄美大島におけるオオツタノハ製貝輪：現生貝調査からみた素材採取地と採取法」『日本考古学協会第 79 回（2013 年度）総会研究発表会要旨集』日本考古学協会 36-37 頁
- 上村俊雄・本田道輝 1984「沖永良部島スセン當貝塚発掘調査概要」『南西諸島の先史時代に於ける考古学的基礎研究』科学研究費補助金（総合研究 A）研究成果報告書 鹿児島大学法文学部考古学研究室 12-22 頁
- 河口貞徳 1973「上能野貝塚発掘概報」『鹿児島考古』第 7 号 鹿児島県考古学会 59-68 頁
- 川口雅之 2015「古墳時代後期～奈良時代における大隅半島と大隅諸島の土器」平成 27 年度第 6 回奄美考古学会（種子島大会）研究発表会資料
- 岸本利枝ほか 2005『大堂原貝塚』名護市教育委員会
- 北野勘重郎・森幸一郎 2011「和泊町西原海岸遺跡の調査概要」『奄美考古』第 6 号 奄美考古学会 59-68 頁
- 北野堪重郎・森幸一郎 2013『西原海岸遺跡』和泊町教育委員会
- 木下尚子 1996『南島貝文化の研究：貝の道の考古学』法政大学出版局
- 木下尚子 2003「貝製装身具からみた広田遺跡」『広田遺跡』広田遺跡学術調査研究会・黎明館 329-366 頁
- 金武正紀ほか 1980『宇堅貝塚・アカジャンガー貝塚』具志川市教育委員会
- 倉元良文 1996『火ノ上山遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター
- 桑原久男ほか 2003『広田遺跡』広田遺跡学術調査研究会・黎明館
- 里山友廣 1988『市理原』龍郷町教育委員会
- 島袋洋ほか 1996『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県教育委員会
- 白濱秀記・三垣恵一 2003『火之上山遺跡』上屋久町教育委員会
- 新里貴之 1999「南西諸島における弥生時代並行期の土器」『人類史研究』第 11 号 人類史研究会 75-106 頁
- 新里貴之 2000「スセン當式土器」高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会編『東アジアの人と文化』上 尚生堂 153-173 頁
- 新里貴之 2004「沖縄諸島の土器」『考古資料大観 12 貝塚後期文化』小学館 203-212 頁
- 新里貴之 2008「琉球縄文土器後期」小林達夫編『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会 822-829 頁
- 新里貴之 2009「貝塚後期文化と弥生文化」設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編『弥生時代の考古学 1：弥生文化の輪郭』同成社 148-164 頁
- 新里貴之 2012「貝塚時代後期文化と古墳文化」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『古墳時代の考古学 7：内外の交流と時代の潮流』同成社 146-158 頁
- 新里貴之 2013「ナガラ原東貝塚出土のスセン當式類似土器について」木下尚子編『ナガラ原東貝塚の研究』熊本大学文学部 238-248 頁
- 新里貴之・北野堪重郎 2014「奄美諸島・貝塚時代後 1 期の土器文化」新里貴之・高宮広土編『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』六一書房 145-156 頁
- 新東晃一・大久保浩二 1995『嶽野中野 B 遺跡』西之表市教育委員会
- 高梨修 2003『小湊フワガネク遺跡群遺跡範囲確認発掘調査報告書』名瀬市教育委員会
- 高梨修 2005『ヤコウガイの考古学』同成社
- 中園聡 1988「土器様式の動態：古墳の南限付近を対象として」『人類史研究』第 7 号 人類史研究会 31-69 頁
- 中村耕治 1977「横峯遺跡の調査」『指辺・横峯・中之峯・上焼田遺跡』鹿児島県教育委員会 14-17・26-27 頁
- 中村愿ほか 1980『馬毛島埋葬址：鹿児島県西之表市馬毛島椎ノ木遺跡』西之表市教育委員会
- 中村友昭 2007「古墳時代の文化交流」『考古学ジャーナル』No.564 ニューサイエンス社 21-25 頁
- 中村直子 2013「ナガラ原東貝塚出土の成川式土器の位置づけ」木下尚子編『ナガラ原東貝塚の研究』熊本大学文学部 259-268 頁
- 中山清美 1983「兼久式土器 [I]」『南島考古』第 8 号 沖縄考古学会 50-51 頁

西園勝彦 2009『屋鈍遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター

橋口達也ほか 1996『鳥ノ峯遺跡』中種子町教育委員会・鳥ノ峯遺跡発掘調査団

橋口尚武 1990「種子島の考古学研究：その基礎資料（Ⅰ）」乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会編『九州上代文化論集』139-168 頁

本田道輝 2004「大隅諸島の土器雑感」『平成 15 年度地域貢献特別支援事業報告書：文化島嶼圏社会の自立化促進』鹿児島大学 27-28 頁

盛本勲ほか 1989『清水貝塚』具志川村教育委員会

盛園尚孝・酒匂義明 1986『本村丸田遺跡』南種子町教育委員会

Pearson, Richard. 1981. *Subsistence and Settlement in Okinawa Prehistory: Kume and Iriomote*. University of British Columbia, Canada.

図版出典

- 図 1 1 (桑原ほか 2003)、2 (新東・大久保 1995)、3 (中村ほか 1980)、4 (橋口 1990)、5 (高梨 2003)、6 (新里原図)、7・10・11 (新里原図)、8・9 (北野・森 2011)、12・13 (安里・名嘉真 1979)、14 (盛本ほか 1989)、15 (新里原図)、16 (金武ほか 1980)、17 (新垣ほか 1957)、18 (島袋ほか 1996)、19 ~ 23 (Pearson 1981)
- 図 2 24・26 ~ 30 (新里原図)、25 (橋口ほか 1996)、31 (桑原ほか 2003)、32 ~ 36 (中村ほか 1980)、37・38・41・42 (橋口 1990)、39 (白濱・三垣 2003)、40 (倉元 1996)、43・44 (新東・大久保 1995)
- 図 3 45・47・49 (高梨 2003)、46 (新里原図)、48 (北野・森 2011)、50 ~ 57 (新里原図)
- 図 4 58 (中山 1983)、59 (新里原図)
- 図 5 60 (岸本ほか 2005)

たねがしま
種子島

わののお
輪之尾遺跡

なかたねちょう
中種子町

おきのえらぶじま
沖永良部島

すせんとう
スセン當貝塚

ちなちょう
知名町

